

はやいもので2026年もあっという間に半分終わりました。夏真っ盛り、暑い日が続いており、汗に弱い補聴器や人工内耳が壊れないか心配しています。

さて、今月のカスタネット通信は6月26日(金)・27(土)の2日間、広島市で開催された第27回日本言語聴覚学会(ST学会)と海の日にぴったりな映画についての話題です。

ST学会の報告



学会は個人が日常の臨床や研究をまとめて、口頭やポスターで発表をする場です。それ以外にも、同様のテーマで研究している人が登壇してその内容について発表する「シンポジウム」や、意見交換・討議を行う「パネルディスカッション」といったプログラムが用意されています。



今回の学会では『補聴器医療の最前線：実耳測定を基盤とした補聴器適合の臨床と今後の展望』というテーマの講演を、

お菓子を食べながら聞く『スイーツセミナー』という企画がありました。座長を務めたオギジビのSTが、少しの解説とともに報告します。

補聴器は電気ので音を強くして耳に届ける器械です。従って、音が適切に増幅されて（強くなって）着用者の耳に届いているかどうかを確かめる作業は、補聴器の調整において不可欠です。オギジビでは多くの場合、この作業を、スピーカから音を出して補聴器装用時と非装用時の反応を比べる方法（ファンクショナルゲインの測定）で行っています。しかし、左右差のある難聴で聞こえにくいほうの耳に装用する場合や、音への確実な反応が得にくい場合などは、この方法による評価が困難です。また、いま主流のデジタル補聴器の非線形増幅^(注)の機能もファンクショナルゲインだけでは評価できません。そこで注目されるのが『実耳測定』です。これは、マイクロホンにつながる細い管を耳に挿入して鼓膜面近くの音圧を測定し、補聴器による増幅の程度を評価する方法です。着用者が音刺激に応答する必要はなく、左右別に短時間で、補聴器を通して鼓膜面に届く音の強さを知ることができます。これまでオギジビの臨床では、主に聞こえにくい側の耳に補聴器を装用する場合に実施してきました。



(注) 入力音の大きさに応じて増幅の程度を変える機能

さて、学会初日の午後3時、約200名の聴衆に広島の銘菓が数個入った袋とジュースの紙パックが配られ、予定より約10分遅れてセミナーが始まりました。60分の枠に演者が3名、20分、20分、10分というタイトな時間配分でドキドキの幕開けです。第1題は実耳測定の理論を、補聴器とその適合の歴史までさかのぼって、分かり易くひも解いてくださいました。第2題は、適合不十分でうまく使えていなかった補聴器を、実耳測定を活用して調整し、適合状態に至った事例の紹介、第3題は、クリニックを運営する耳鼻科医師の視点で、補聴を取り巻くさまざまな課題についての的確なご指摘をいただきました。



↑ レモンケーキやもみじフィナンシェ

オギジビのような補聴臨床に携わるSTは少数派であり、聴衆の多くにとって実耳測定は馴染みが薄く難しい話題であったかもしれません。でも高齢期難聴への対応の重要性は他領域で働くSTにも認識されつつあり、今回もスウィーツの魅力に加え、テーマにも興味を持って多くの聴衆が集まったと思われます。私たちはこれまでも実耳測定が補聴臨床において重要な検査であることを臨床的な実感をもって認識してきました。今回セミナーの準備段階から関わる機会を得て、実耳測定の少し異なる捉え方を知り刺激を受けました。臨床の流れの中で実耳測定をどう活用するか、検討を続けたいと思います。
(鈴木)

海底の世界への冒険 🍷🍷🍷🍷🍷🍷🍷🍷🍷🍷🍷🍷🍷🍷🍷🍷

今年2月に『映画ドラえもん 新・のび太の海底鬼岩城』が公開になりました。公開してから5か月が経ちましたので、既にご覧になった方も多いかと思います。この作品は、『ドラえもん のび太の海底鬼岩城』（1983年）を原作とするリメイク作品で、同作から43年ぶりに映画化されたとのこと。原作は私が生まれる前の作品ですので、作品名しか知りませんでした。

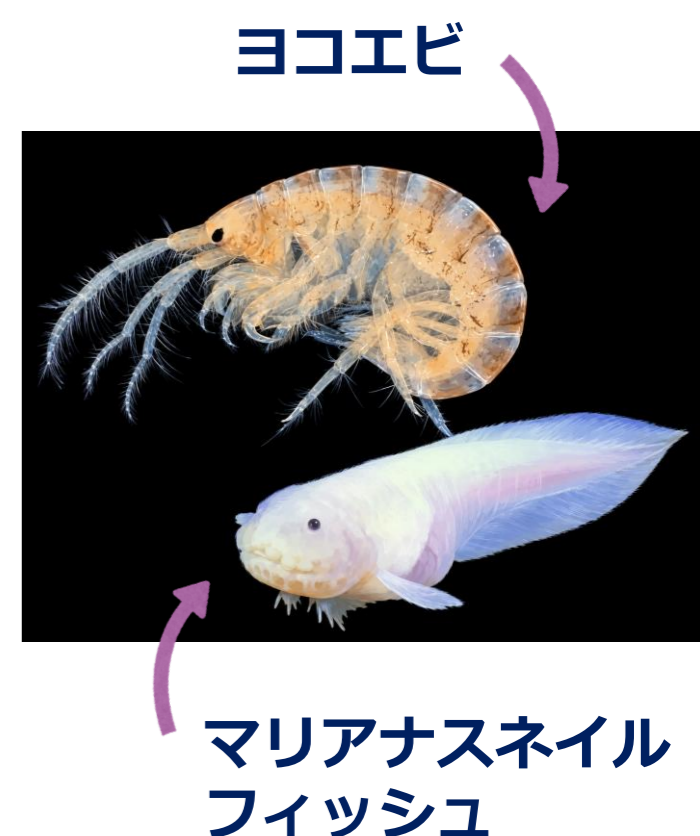


ところで、この映画のキャッチコピーはご存じですか？映画館に置いてあるフライヤーやポスター、映画の予告などに使われていたかと思います。

この映画のキャッチコピーは「海底1万メートル。地球には、まだ誰も知らない世界があるー」「ボクらはきっとわかりあえる。海の底で。心の底で。」「行こう、誰も知らない海底大冒険へ!」「誰も知らない海底大冒険へ、キミも一緒に飛び込もう!」です。

ドラえもんやのび太くんがバギーと探検していた海底1万mには何があるのでしょうか。1万mという深さは、世界で一番高い山エベレストの標高約8,848.86mよりも深いのです。マリアナ海溝の最深部「チャレンジャー海淵」がその例の一つに挙げられます。この深さは、水圧がとても高く、深海探査船ですら水圧でバラバラになってしまいます。その為、船の設計は難しく、実際に探査成功した回数はたった4回とのこと。

しかし、人間や船すら水圧で押しつぶされてしまうような過酷な環境にも深海生物はちゃんと存在するそうです！ただ、実際にいる魚の数は少なく、映画でドラえもんが「オイシーン貝」を使って集めた時のような綺麗な色を発光している魚ばかりではないとのこと…。そのような深海魚は水深200~1500mくらいに多く存在していて、映画にも出てきたメンダコは水深4000mくらいの深さにいるそうです。よく見つかる生き物としては、ヨコエビやナマコ、マリアナスネイルフィッシュという深海に適應した生物がいるそうです。



このような深海にいる魚は、地上に生きた状態で連れてくることは基本不可能です。理由は私たち人間が海底1万メートルに行くのが難しいのと同様で、圧力や環境に耐えられないからとのこと。ドラえもんが完成する2112年頃には科学技術が進展して、「テキオー灯」のようなどんな環境にも適應できるようになる道具ができて、私たちも深海を冒険できるかもしれませんね。皆さんはドラえもんの道具で、何を使ってみたいですか？
(中村)